

【二】〔織田信長黒印状〕（年未詳）

（八木家文書 P〇九七〇二 No.一五九二一〇）



《釈文》

就ニ肇春之儀一、太刀
一腰・馬一疋祝着候、
誠慶事、珍重候、
猶宮内卿法印可ニ申宣一候、
恐々謹言

正月廿八日 信長（黒印）

本願寺

《読み下し》

肇春（ちょうしゅん）の儀に就き、太刀
一腰・馬一疋祝着（しゅうちゃく）に候、
誠に慶ばしき事、珍重に候、
なお宮内卿法印
申し宣がべく候
恐々謹言

正月廿八日 信長（黒印）

本願寺

《用語》

【肇春】春のはじめ。初春。はつはる。
【祝着】喜び祝うこと。祝うこと。慶賀。
【珍重】めずらしくて大切なこと。めずらしいものとして大切にすること。また、そのさま。

【宮内卿法印（くないきょうほういん）】松井友閑（まついゆうかん）。戦国く安土桃山時代の武将。生没年不詳。織田信長の右筆。元亀元年（一五七〇）堺政所となり信長政権の都市支配の一翼を担う。同年、信長が京・堺の茶器を集め、天正二年（一五七四）正倉院の蘭奢待（らんじやたい）を拝受したときにはそれぞれ奉行をつとめ、天正八年石山本願寺開城には目付となるなど、終始信長側近として活躍。信長亡きあとも秀吉に従ったが、天正一四年堺政所の職を罷免された。

【恐々謹言】手紙の本文の結びに記して敬意を表わすことば。おそれながらつつしんで申し上げるの意。

《解説》

初春の祝儀として本願寺から織田信長に贈られた太刀・馬に対しての礼状です。松井友閑（生没年不詳）が、信長の使者として取り次ぎを行っています。松井友閑は、織田信長の家臣で、大坂の本願寺や京都・畿内の寺社との交渉に当たっていた人物です。

この文書の該当年次は、信長が本願寺と和睦した、第一次和睦の天正元年（一五七三）、第二次和睦の天正四年、第三次和睦の天正九年・同十年のいずれかで、おそらく天正九年と推定されています（青木裕美「八木家文書とその伝来について」『群馬県立歴史博物館紀要』第三九号、二〇一八年）。